

ラハティ・ポリテクニクを訪問して The Visit to LAHTI POLYTECHNIC, FINLAND

水島和夫^(*1), 林 哲三^(*2), 中村滝雄^{*3)}

目 次

1. はじめに
2. ラハティ・ポリテクニクとの協議
 - (1)交流の現状
 - (2)協議の内容と成果
3. ラハティ・ポリテクニクの概要
 - (1)フィンランドの社会と教育制度
 - (2)ラハティ地域教育コンソーシアム
 - (3)ラハティ・ポリテクニクの教育
 - (4)デザイン学部
4. ラハティ・ポリテクニク・デザイン学部の実習・制作環境
 - (1)実習室の使用時間
 - (2)実習室の施設設備
 - 銀工芸・ジュエリー
 - インダストリアル, インテリア・デザイン
 - (3)実習室等の運営, 管理
5. デザイン学部学生作品等の展示
6. ヘルシンキ工業芸術大学
7. おわりに

1. はじめに

2001年12月初旬, 水島和夫, 林哲三, 中村滝雄及び本学学生課の新井健二の4名は, 高岡短期大学(以下,「本学」という)と友好協力協定を締結し学生交換交流等を行っている, フィンランド共和国ラハティ市のラハティ・ポリテクニック(以下,「ラハティ校」という)を訪問した。

本訪問の目的は, 学生交換交流の拡充, 交流展の推進など両校の交流関係の一層の推進について提案し, 協議を行うこと, さらにラハティ校の特色ある教育内容, 運営方法, 施設・設備等をつぶさに視察・研究し, 本学の管理・運営と教育の一層の向上に役立てようとするものである。

またこの度のフィンランド訪問では, 同国首都ヘルシンキ市のヘルシンキ工業芸術大学をも視察した。同大学と比較することにより,



写真1 ラハティ校デザイン学部校舎



写真2 本学訪問団一行とラハティ校関係者

ラハティ校の実態・特色について, より深く理解することができたと考えている。

本稿では, 両校交流の一層の推進を図る上で大きな成果を得ることができた協議の内容を報告すると共に, ラハティ校の実態について調査の内容を紹介し, また, これに関連してヘルシンキ工業芸術大学の概要について簡単にふれることとしたい。

本稿各章の担当については, 「4. ラハティ・ポリテクニック・デザイン学部の実習・制作環境」を中村が, 「5. デザイン学部学生作品等の展示」を林が担当し, その他の章は水島が担当した。

なお, 今回のフィンランド訪問にあたっては, ラハティ校・デザイン学部において長年にわたって教鞭をとり, 同校と本学, さらに日本との交流の推進に常々多大のご尽力をいただいている児島宏嘉先生に全面的にお世話になり, また, ヘルシンキ工業芸術大学への訪問に際しては, 同大学陶芸・ガラス工芸学科の中田一志講師のお世話になったことを付記し, 誌面を借りて厚くお礼を申上げる。

2. ラハティ・ポリテクニックとの協議

2.1 交流の現状

本学とラハティ校との間においては, 1997年11月, 友好協力関係に関する協定が締結され, その第2条において, (1)研究と教育に関する情報と成果の交流, 及び(2)教官及び学生の交流の実施を通じて友好協力関係を促進するとしている。さらに, 1998年9月両校の間で学生の交流に関する覚書が交わされ, 各年度2名以内の学生を相互に受け入れることとなった。

このような取決めにもとづいて, フィンランドから1998年と99年に各2名, 2001年に1名の学生が来日し, 2002年来日予定の学生も既に決定している。一方, 本学から1999年度以降毎年2名の学生を同校デザイン学部に伴年間派遣している。(*1)



写真3 本学からの派遣学生

また、1998年6月には、本学においてラハティ校・デザイン学部学生の作品展を開催している。

本学から留学を希望する学生は2000年までは2名であったが、派遣が回を重ね留学体験情報が学内に浸透するとともに、2001年には応募者が7名に増えたため、この中から選考により2名に絞り込んで派遣することとなった。また交流展については1999年以降行われていない。

以上のような状況を踏まえ、相互に受け入れられる学生数の増、相互交流展の開催、さらに、未だ組織的には行われていない教員の交流を提案し、両校の交流の拡大について、協議するために、今回ラハティ校を訪問することになったものである。

2.2 協議の内容と成果

12月3日行われた、ラハティ校ARVO ILMAVIRTA総長、LISA TIIROLA-SANTALAデザイン学部長及び同学部児島宏嘉講師との協議において、本学からの提案について次のような基本的合意を得ることができた。

学生交流については、両校の受入人数を2名以内から4名以内に改める。

相互に展示交流を行うこととし、先ず、2002年度に本学の学生作品の展覧会をラハティ側で開催する。

教員の交流を実施する。

協議の中では、学生交流の人数増について、

本学からは、留学希望者が急増している状況を説明し、一方、ラハティ校側からは、日本からの受入数はともかく、日本への派遣人数は2名を越える可能性は小さい旨述べられた。教員の交流については、ラハティ側は、その必要性は認められるが、同校のヨーロッパ諸国との交流においても教員達が繁忙なためなかなか派遣できないという事情などが述べられた。



写真4 ラハティ校との協議

このような意見交換が行われたが、ラハティ校側の好意と児島氏のご尽力により上記のような基本的合意に至ることができたものと考えている。

なお、展示交流及び教員の交流について経費の分担、受入人数等について今後両校で検討し、覚書を取り決めることとなった。

以上のような協議の成果に基づき、既に学生交流に関する新たな覚書の交換が済んでおり、また、現在展示交流と教員の交流に関する覚書の作成に向けて準備が進められている。

3. ラハティ・ポリテクニクの概要

3.1 フィンランドの社会と教育制度

北欧フィンランドは人口520万人の小国であるが、WORLD ECONOMIC FORUMの「2001年国際競争力レポート」によれば、これから5年間における経済成長見込み率が世界第1位^(*)2)と、きわめて高い国際競争力を持っている。世界の3分の1のシェアを持つ

携帯電話メーカー、ノキア社などがあり、電子・光学機器が、パルプ/紙をはるかにしのぎ第1位の輸出産品となっている。

フィンランドの高い経済発展は、国民の教育水準の高さに負うところが大きい。識字率は事実上100%ときわめて高く、25歳から35歳の世代の83%が後期中等教育以上を修了している。同国教育省は、近い将来同一年令世代の60%から65%に高等教育の門戸を開く計画を有しており、現在の20歳台の若者の半分以上が、生涯のいずれかの段階で高度な学位又は資格を持つことが見込まれている。

フィンランドには、現在12の大学(芸術アカデミーを含む。)と30のポリテクニクが設置されている。ポリテクニクは、1990年代の広範な高等教育改革で設けられたものであり、産業との密接な協力関係を重視し、より実践的な教育を特色としている。改革の目的の一つは、フィンランドの高度職業教育を国際的な教育市場の水準に引き上げることであり、同国のポリテクニクは高等教育の国際化に大きな役割を果たしている。国内30のポリテクニクの中でも規模が大きく、成功しているのが首都ヘルシンキ市の北方100kmに位置するラハティ市のラハティ・ポリテクニクとなっている。

3.2 ラハティ地域教育コンソーシアム

1910年代の初めに家内工業指導者養成学校として始まったラハティ校は、国立の専門学校^(*3)であったが、1990年代の改革によるポリテクニク化の際きわめてユニークな形の運営形態となった。すなわち、ラハティ市とその近隣計14市町村(域内人口約20万人、内ラハティ市は9.5万人)でコンソーシアム、『ラハティ地域教育コンソーシアム』を組織して運営を行うというものである。^(*4)

筆者らは、コンソーシアム事務局を訪問し、アルポ・ヘイノネン事務局長から説明を受けたが、同氏によれば、コンソーシアムの運営

は会社経営に似ているということであり、14自治体の首長レベルから構成される理事会で予算等が決定されている。



写真5 ラハティ地域教育コンソーシアム事務局訪問

ラハティ地域教育コンソーシアムの組織・運営は別図のとおりであり、同コンソーシアムは、9学部を有する高等教育機関(基本的に4年制で学士を取得できる。)であるポリテクニクと、多様な専門学校・職業学校10校から構成される生涯教育機関であり基本的に3年制のサルパウス(SALPAUS)、さらに、障害者の雇用・リハビリテーションのための機関の3機関^(*5)を運営している。興味深いのは、事務能率化・経費節減のため、これらの機関の、経理、管財、給食、情報通信、図書館の各サービスや企画部門が共用化されている点である。

2001年度、同コンソーシアム全体で学ぶ正規学生(fulltime student)数は11,200人、内ポリテクニクは3,600人となっており、また、全体の教職員数は1,500人(内370人がポリテクニクの教職員)を数え、同コンソーシアムはラハティ地域で3番目に大きな企業体となっている。コンソーシアム全体の予算額は61,400万(フィンランド)マルク(約119.7億円、1フィンランド・マルク=19.5円の場合)、その内ポリテクニクに関しては16,600万マルク(約32.4億円)となっている。予算額の64パーセントが人件費となっている。また、ヘイノネン氏によれば、学生1人に約5,000米ドルの経費がかかっており、これを、国が

50%負担し、他の50%を学生の出身地の自治体が負担するという原則になっている。この他、企業勤務者の研修教育等による企業からの収入やEUプロジェクトを行うことによる収入等もある。

なお、ラハティ校では、学生の授業料は、必要な教材や実習材料等の自己負担分の他は無料とされている。

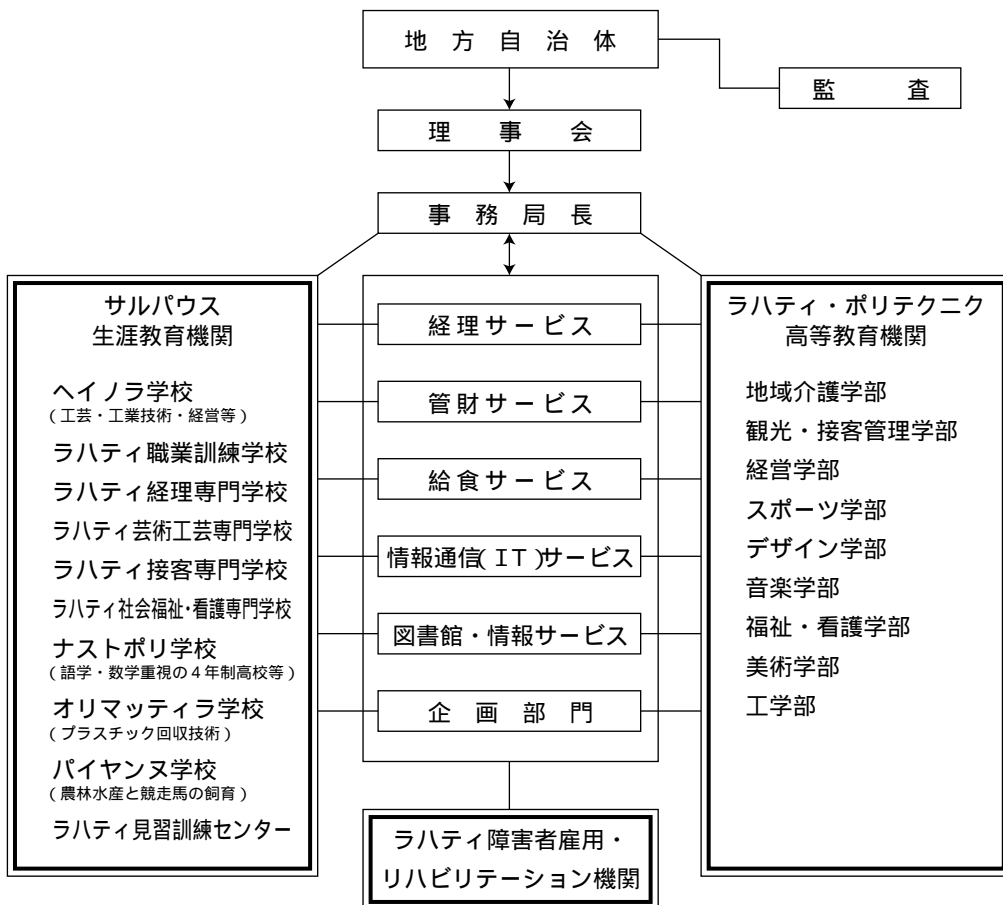
3.3 ラハティ・ポリテクニックの教育

ラハティ校は次のような学部から構成されている。

- ・経営(Faculty of Business Studies)
- ・スポーツ(Pajulahti Institute of Sports)
- ・デザイン(Institute of Design)
- ・音楽(Faculty of Music)
- ・福祉・看護(Faculty of Social and Health Care)
- ・美術(Institute of Fine Arts)
- ・工学(Faculty of Technology)
- ・観光・接客管理(Fellmanni Institute/School of Tourism and Hospitality Management)
- ・地域介護(Faculty of Parish Social Services)

別図

ラハティ地域教育コンソーシアム2001年事業モデル



同校では、正規学生数3,600人^(*6)に対し150人の常勤教員が配置され、そのうち75%以上が修士以上の学位を持っているとされる。またこの他に70人程度の非常勤教員を、他の教育機関、産業界等から迎えている。常勤教員1人あたりの学生数は24人となる。

2001年入試では、ラハティ校全体の平均競争率は12倍であり、学部・コースによっては数十倍に達することもある^(*7)。なお、受験生は同校の各学部の中から3学部まで受験でき、また、他のコンソーシアムの同種の学部を受験することもできるとされている。

ラハティ校の入学資格は、高校を卒業し大学入学資格を持つ者の他、職業教育学校修了者(Diploma取得者)に与えられており、例えばデザイン学部には、サルパウスの工芸・美術学校(Lahti College of Arts and Crafts)の卒業者も入学している。選考は入学試験成績のみによって行われ、高校や職業学校での成績は勘案されない。

9学部について、計40以上の専攻を含む合計17の学士プログラムが設けられている。ポリテクニックで取得できる学士は、大学の学士に比べて、職業との関連にはっきりと力点が置かれており、産業界のニーズに対応するようデザインされている。実践的な実習とプロジェクトが、産業界等との活発な協力関係とともに、教育に不可欠な要素となっている。ラハティ校での卒業論文の75%は企業その他の機関のオーダーに沿って作成されている。また、産業界との連携プロジェクトを進めるために、同校には、マーケティング・マネジャーが配置されている。^(*8)

ラハティ校での授業は基本的にフィンランド語で行われているが、経営学部には、英語で行われる学士コース(国際ビジネス・プログラム)や国際ビジネス・マネジメントの職業能力開発プログラムが設けられている。また、個々の授業科目等で英語で行われるものもある。さらに、特に、美術、デザイン、音

楽の分野に関しては、公式には英語での授業ではないが、教師と学生の間で適当な方法によることが可能とされている。本学からの派遣学生によれば、授業はフィンランド語のため分からないが、授業の終わりに外国人学生を集めて英語でサマリーを教えてくれるとのことである。

同校では8月から1月と2月から6月の2学期制をとっており、基本的に4年の間に、共通基礎科目、学部基礎科目、専門科目、卒業論文と実践的な実習を履修して学士が取得できることとなる。語学は、フィンランド語、スウェーデン語と他の外国の1ヶ国語が必修となっている。

3.4 デザイン学部

デザイン学部(Institute of Design)には、デザインとヴィジュアル・コミュニケーションの2つの学士プログラムがある。

学士取得には、160単位(クレジット)が必要であり、その内訳は、共通基礎科目15単位、プログラム固有の基礎科目30単位、専門科目75単位、選択科目10単位、職業実習(Professional Practice)20単位、卒業論文10単位となっている。

なお、フィンランドでは、平均約40時間の履修で1単位(1 credit)と計算している。

同学部の教育では実習(Workshop training)及び企業との協力プロジェクトが教育プロセスの中で基本的な役割を果たしており、フィンランドと外国の有力企業が協力先となっている。

学士プログラムは、筆者らが訪問した時点では、次のようなコースから構成されていた。

- デザイン ものづくり関係
- ・インダストリアル・デザイン(Industrial Design)
- ・クラフト・デザイン(Craft Design)・・・
2, 3, 4年生^(*9)
- ・家具デザイン(Furniture Design)・・・1

- 年生のみ^(*9)
- ・インテリア・デザイン(Interior Architecture)
 - ・パッケージ・デザイン(Package Design)
 - ・ファッション・デザイン(Fashion Design)
 - ・銀工芸・ジュエリー(Silversmithing and Jewellery)
 - ヴィジュアル・コミュニケーション 情報関係
 - ・グラフィックデザイン(Graphic Design)
 - ・マルチメディア・プロダクション (Multimedia Production)
 - ・写真(Photography)
 - ・映画・テレビ(Film and Television)

この他、同学部には、社会人向けのポストグラジュエイト・コースとデザインの短期コースがあり、参加者の職業能力向上・更新が図られており、これらのコースに年間2,000人のデザイン関係者が参加している。^(*10)

同学部の各コースは、原則として1学年12人の少人数教育を行っている。実習室等はプロフェッショナルな要求にも対応できる高度な設備を備えている。各室には学生が個人で使える実習机が概ね16人分設置されている。基本的に、このうち12は学生定員分、残りが留学生その他に割り振られている。

国際交流に関して、同学部は40以上の外国のデザイン関係機関と提携関係^(*11)にあり、学生、教員の交流及び展示交流を行っている。また E C の教育・研修プログラム「SOCRATES」や北欧地域の協力プログラム「NordPlus」に基づく留学生を受け入れている。

4. ラハティ・ポリテクニク・デザイン学部の実習・制作環境

高岡短期大学では、学生の多様な制作活動に配慮するとともに安全面を勘案し、実習室をはじめとした教室の使用について時間等の

ルールを各学科、コースによって、また教室ごとに定め運用してきた。しかし、各教室のルールが一覧表で示されないまま運用されているため、学生の混乱を招くとともに時間外使用について管理する側からの困惑も表出している。また不審者の学内侵入、長時間の実習において緊張感の欠如等による事故の発生が危惧されている。このような状況のもと実習室等について、どのように運営管理を行えばより効果的な教育と制作活動が行えるか、教務委員会において教室使用時間等の協議を行い、2001年12月より「時間外教室使用願」申請制度を実施し始めた。

本章ではこれらの事情を考慮し、ラハティ校デザイン学部においてどのように実施されているかその施設環境を含めた実情を視察調査した内容を報告する。なお、デザイン学部は実習を重視しているところから素材を扱う実習室を対象とした。

4.1 実習室の使用時間

ラハティ校デザイン学部において実習による教室使用時間は8:00から20:00である。施錠は社会事情によるセキュリティが考慮され、教室、実習室のみならずビル全体の管理を警備員が行っている。その警備体制は警察と同程度の厳しさで行われ、特に時間外などは徹底して行われている。教員も鍵を所持しているため特殊な事情の際には教員が行うこともある。しかし、教員や職員は施錠管理についてノータッチが原則である。また土曜日、日曜日に関しても教員の出校とともに許可を得れば学生の教室使用が可能になるが、ほとんどの場合教員は出校していない。卒業制作など特別な事情により時間外に実習室を使用しなければならない事態が起きた時は、通常の実習室ではない別の部屋が用意されており使用を許可される。(銀工芸・ジュエリーの例)その際も教員が同行することなく警備員によって厳重に管理が行われる。

通常の教室使用時間帯は本学と同じである。その内、危険を伴う機器や火気などを扱う実習室の使用に関して19:00までとしている本学は僅かに短い時間である。しかし、11時間の実習室使用は十分過ぎる時間であり有効に活用できるはずと意識しなくてはならないであろう。

また同時期に視察をしたヘルシンキ工業芸術大学においては、教員、学生各個人が登録された鍵を所持するシステムを実施している。学生は使用する時間を申請し、あらかじめ教員に許可を得て登録する。所持した鍵によってのみ申請した教室に入室でき、使用が可能になるシステムである。しかし、登録以外の教室や時間等について使用が不可能になり、ラハティ校よりも使用できる教室が厳しく限定されている。このシステムにおいては、学生の綿密な計画が要求され、他の教室の訪問あるいは制作のプロセス中発生した計画外の作業でもあらかじめ許可を得ないと使用できず、不合理になることもある。

以上のように、施錠や時間管理について教職員と警備員との役割分担や使用時間が明確になっていることが印象的であった。時間の制限や施錠に始まる運営管理は、社会事情によるセキュリティーあるいは学校運営のみならず、使用者のけじめでもあり自己管理にも繋がることであると感じた。



写真6 銀工芸・ジュエリーコースに設けられた時間外実習室。基本的な道具が設備されている

4.2 実習室の施設設備

4.2.1 銀工芸・ジュエリー

銀工芸とジュエリーコースは一つの独立した建物に配置されている。1階には事務室と学生が使用する材料を提供する部屋がある。学生は使用する材料を自らが準備するのではなく、学校内に設置された施設において入手する。本学からの交換留学生(ジュエリーコース)は初期に一定の金額を学校に納め、使用の際に材料等を申請し入手している。その際オーバーした金額はさらに追加して納める。それらの状況は、制作する作品名、購入した種類と量、金額等が記入されるとともに、制作歴として記録され、学校の活動歴ともなる。

2階以上は両コースに共通する中型工作機



写真7 銀工芸・ジュエリーコースの棟にある工作機械室



写真8 銀工芸・ジュエリーコースの間に位置する研磨室(シルバー用)

械、鍛金、エナメル作業など内容によって専門の実習室が配置されている。特に鍛金を行う実習室は二重ドアにするなど防音の措置がなされ、隣接する実習室に音が漏れないよう配慮されていた。また小型の機械(卓上旋盤、ボール盤等)や道具は各実習室に配置されている。

さらに両コースに共通する酸洗い室、研磨室(シルバー用)、研磨室(ゴールド用)、着色・メッキ室、鑄造・溶解室、鑄造用石膏室の6室は、各作業専用のスペースとして両コースの実習室の間に配置されている。その出入口は双方に設けられ、自由に往来できスムーズな導線が確保されるよう考慮されていた。

作業机は全ての学生に各1台が与えられ

る。特に微妙な手作業が多く要求される銀工芸とジュエリーコースでは、身長等体型に関わる条件と作業内容によって、高さ調整や微妙な配置が可能である作業机と椅子が設置されていた。その机には粉塵やガスの吸引装置が組み込まれた作業用ライトが取り付けられている。また各机にはジュエリー用として基本的に必要な道具があらかじめ配備されている。破損や使用不可能になった物あるいは不足している道具等は申し出ることによって学校側から提供されるシステムとなっている。このシステムは学生の経済的、時間的な軽減とともに制作への集中に繋がると感じた。なお、個人の独特な制作形態に必要な特殊な道具は当然のことながら各学生が用意する。

また、部屋の配置で特徴的であったのは、



写真9 銀工芸・ジュエリーコースの間に位置する研磨室(ゴールド用)



写真11 銀工芸・ジュエリーコースの作業机と作業する学生



写真10 銀工芸・ジュエリーコースの間に位置する鑄造・溶解室



写真12 ガラス張りの教室

それぞれの室の一隅にガラス張りの教官室が設けられていることであった。これは教官が学生の作業の様子を見ることができると同時に、学生にしてもいろいろと質問や、指導を受けるのに都合が良く、機能的であるように感じた。そしてこの配置は実習において授業をスムーズに進めていくことで、大変有効ではないかと思った。

4.2.2 インダストリアル・インテリアデザイン

デザイン関係の教室は学生人数分の机が配置され、企画設計や軽作業を行う。模型制作（IDクレイ・発砲材による）等の実習室は隣接しており、プロトタイプ制作に至るまでのデザイン計画が行いやすく配置されてい

る。プロトタイプ作品制作の際は、それぞれ陶芸、金工、木工の充実した専門実習室が用意されている。デザイン学部では、基本的に量産を対象としたデザイン製品の制作を理念としているため、陶芸は石膏型^(*12)が主流になっている。

金属関係の実習は工業製品等基本的に図面作業が多く、アーティストックな自由度の高い作品の制作がないので、工作機械(旋盤、フライス盤等)や曲げ(パイプベンダー等)に関する機械が多く配置されている。その作業スペースは広く充実した設備が確保され、工作機械(切削)のスペースと切断、曲げ、溶接、組み立て等を行うスペースとに分かれている。工作機械の台数は旋盤、フライス盤などそれぞれ5台程度が設置され、その間隔は安



写真13 インダストリアルデザインコースの教室



写真15 ウレタン等による模型制作室。切削による粉塵を吸引する作業台の上で作業



写真14 IDクレイによる模型制作室。室内に粘土を軟化させる電気炉が設置されている



写真16 陶芸実習室。量産するため石膏型に粘土を流し込み制作している

全操作が十分に可能なスペースが取られている。

木工機械室の実習室も金工機械室同様、その作業スペースは広い面積が確保され、配置



写真17 金属実習室の組み立て溶接作業台

されている。加工機械の間隔は十分に設けられ安全面が考慮されていた。この実習室の一部には制作に必要な多種にわたる木材材料、ボルトや木ネジなどが取り揃えられており、必要に応じて学生に販売されているコーナーがある。このシステムは金工実習室でも実施されており、ジュエリーの項でも述べた。準備されている材料では学生の全ての要求には応えられないにしても、おおよそ制作に応えることができ、材料の選択やその購入に関わる煩わしさからの開放や時間等の節約が実現できる。また材料を実際に見ながらデザイン計画等の検討ができ、教育的なメリットも大きいのではないかとと思われる。例えば本学の場合、学生が材料を購入する際は近隣の材料店、道具店やホームセンターを駆け回り入手



写真18 金属実習室の工作機械



写真20 木材材料が置かれているコーナー



写真19 木材実習室



写真21 木ネジ等部品が置かれているコーナー

しなければならない。それでも入手できない場合は県外の専門店に注文し、自らが足を運ぶか宅配で入手するようになり多くの時間と労力を費やさなければならない。

4.3 実習室等の運営, 管理

デザイン学部において, 工作機械等の取り扱い説明をはじめ現場での作業指導, 安全指導, メンテナンスや消耗品の補充, 実習室内の整頓等は全てアシスタントが行う。例えば金属実習室において, アシスタントは全ての工作機械の操作方法や道具の扱い方に精通し, 常駐している。学生は1年生でこれらの機械, 工具の使用上のルール説明等を助手から受け, 免許制によって以後自由に使用することができる。また, 取り扱いや操作をすでに熟知している機械は自由に使用する事ができる。技術的あるいは操作上分からないこと



写真22 防音保護具を使用している学生



写真23 エレベーターの前フロア

などは適時アシスタントに相談しながら制作を行うことができる。教員もこれらに精通しており学生に指導を行うことがあるが, その機会は少なくアシスタントに任せている。このようにアシスタントの役割分担が明確にされているところから, 教員はデザインの指導に専念することができ, 総体的にも効果的な指導が可能になる。したがって, 学生も特定の指導教員を探し求めることがなく, それぞれのプロセスでスムーズに制作をすることができるなどのメリットが生まれる。

また保護具の使用を義務付け安全作業を実施するとともに, 実習室に救急箱が備え付けられており, 軽傷への対応と関わる人達全員の安全に対する意識が感じられた。本学ではここ数年保護具使用の奨励, 設備の拡充が行われているが, より徹底した指導と配慮が安全意識の向上と安全管理に繋がるのではないだろうか。

以上のように, ラハティ校デザイン学部の実情とともに本学と異なる点もいくつか取り上げた。それらは異なる歴史, 環境や条件において培われたものであり, 一概に本学と比較することは安易かつ単純にできるものではない。しかし, その中には本学にも効果的と思われる点が多くあり, でき得るところから改善することは可能である。それらを足掛りに本学にある有限な資源とこれから配置される設備を総体的, 将来的に勘案し, システムを再考するのは, 有意義であるとともに効果的なシステムを作り上げなければならない。また高岡短期大学として本科あるいは専攻科での教育理念を明確にし, 施設設備の充実と方向性を見定める必要があるのではないかと思う。

なお, 僅かな時間における視察であり, 見落としした点が多いと思われること, いろいろな要素の関連や時間的流れの中で視察できなかったことなど相対的, 客観的に判断できないことが悔やまれた。

5. デザイン学部 学生作品等の展示

ラハティ校は本学のように一つの敷地内にまとまった建物ではなく、学部ごとに校舎が独立して市内に分散している。デザイン学部の校舎は道路に面した3階建ての単純な箱形で、門や垣根など無く開放的な印象であった。しかし、校舎に入ると教室や作業室などすべての部屋は普段からしっかりと施錠されていて、教員たちは常に鍵を所持し必要に応じて鍵で開けなければならないシステムになっている。このことは最初に受けた開放的な外観の印象と実情とは異なることを改めて実感した。



写真24 壁面を利用した展示



写真25 学生作品の展示

校舎に入り、最初に目に付いたことは、通行や作業に支障のない廊下や階段の空間、そして各実習室の部屋のあらゆる壁面を利用して「もの」が展示されていることである。その「もの」とは、実習の作品、作業関係や学校の連絡事項の案内と思われるチラシ、展覧会のポスター、建物、施設の案内表示板などが、一見雑然と並べられているように見えるが、しかし違和感なくごく自然に見ることができた。

デザイン学部のなかで、学生作品の展示に関して本学と比較した場合、その違いは、場所と方法である。両校とも学生作品の展示は学習成果の発表であり、基本的な考えは同じであると思う。しかし、本学では、一定期間、特定の場所に学生作品全てを展示する方法であるのに対して、デザイン学部の場合は展示可能なスペース、前述したように建物の出入り口、エレベーター前のフロアーや階段、廊下の壁面などを利用して、年間を通じて常時展示している。

デザイン学部の展示は、3週間を一つの展示期間として、年間のスケジュールを組み、授業科目毎に順次行われている。展示する作品は個々の実習授業で制作した作品の中から



写真26 産学協同プロジェクトの作品 1

優秀なものが選ばれる。選出方法は講評会において各自の作品について様々なプレゼンテーションの方法を用いて、作品の特徴、制作意図を相手に分かり易く明確に説明し、さらに学生がお互いに議論を交わしながら展示作品を決定していくのである。

このように、厳選された作品のみが展示されることによって、展示全体の内容は充実したものになっている。また本人にとって、選ばれ、展示されることは大変名誉なことである。この展示によって、普段の授業への取り組み姿勢にも反映され、学生一人一人の作品制作の励みにもなる、と説明を受けた。

また学生作品展示は、学外の誰もが気軽にいつでも鑑賞したり、説明を聞いたりすることにより各々の授業科目の内容を一目瞭然に理解することが出来る。同時に、学生においても校舎内にいろいろな作品が常に身の回りにあるということは、勉学の参考になると共にお互いに制作の刺激になるのではないかと思う。

このようなことから、デザイン学部の展示方法は、教育目的・内容の紹介さらに学生の制作意識・意欲の向上などの面で、具体的でより実践的であり、その効果は大きいと考える。そして本学のような一定期間集中的に展示する方法においても、その教育的効果は認められるが、一時的な事になりがちで、その継続的効果に欠けるのではないかと思う。

次に、地域産業に関わる資料収集について、デザイン学部では本学ほど積極的に資料収集するという事はあまり行われていないようである。その理由の一つは、購入予算の面で困難であるということである。

しかし、デザイン学部では、授業科目の中に産学共同のプロジェクト提携を積極的に取り入れて進めている。特に卒業制作においては、企業と学生・教官がプロジェクトを組んで共同制作を行うケースが多いということである。この共同制作は学内のみの勉学だけで

なく、企業との共同プロジェクトを通じて、社会で求められている物や実際の製品及び生産システムなど、より実践的なものづくりについて体験学習することを目的としている。

このような共同プロジェクトにおいては、必然的に地域の産業の実情をより広く知らなければならぬことであり、デザインを進めていく段階では実際に使用されている製品や場所の状況など、実社会の中で必要な参考資料などを調査、収集することが要求される。

学習成果の集大成である、卒業制作の発表はラハティ市のセレモニーセンターなどで行われるが、作品の中には、企業との共同プロジェクトによってデザインなど意匠登録や特許などに関わり、公開が出来ない作品もあるということだ。



写真27 産学協同プロジェクトの作品2



写真28 ライトアップされた壁面展示

また、この共同プロジェクトによる、学生のアイデアやデザインが企業に採用され製

品となった物が、ラハティ市内の公共の場所やマーケットなどで、実際に使われているのを見ることができる、これも作品展示の一つと云えよう。

ほかの展示施設をみると、フロアの空間や廊下の壁面を上手く有効に利用している。フロアの壁面には、透明なガラス板を前面に用いた棚が並べて取り付けられており、ライトアップされ、小物の作品が陳列されており、展示の目的と共にフロア空間の装飾的効果も十分に考慮されている感じを受けた。これは、本学の壁面展示に参考になると思う。



写真29 オープンスペースコーナー

また、そのフロアの一隅にはいろいろな案内やポスターをきれいに掲示したボードや植物の鉢などが体裁よく置かれ、コーヒーなどを手軽に飲みながら、ひとときの休息や談話のできる、こぢんまりとしたオープンスペースのコーナーも設けられている。これも空間を演出する展示の一つではないかと思う。

また、各実習室は、使用目的に応じて細かく区切られ、機械類、作業台など整然と配置され、制作のための工程見本や過去に制作された作品なども壁面に見易く陳列されていた。

以上の様に、デザイン学部の展示視察を通じて、「ものづくり」の教育においては、その「もの」の目的や方向、方法などの考え方、知識といったデザインの要素と、材料・技術を用いて具体的な形にする実践的要素とが満

遍なく組み合わされていること、さらに学生が常に目的意識を持って学習できる環境を提供することが必要であると考え。そして教育の内容、成果を総合的に視覚的にさらに継続して示すことも重要であり、その一つの方法として、このような学生作品展示があると思う。

デザイン学部の展示には、この大学の教育方針の軸であると言える、実社会(行政と産業)との連携とそれによる実践教育が色濃く反映されていることが明確に示されている。

6. ヘルシンキ工業芸術大学

ヘルシンキ工業芸術大学(The University of Art and Design, Helsinki; 略称U I A H)は、1871年、美術・工芸学校として設立され、1973年に、現在のような学士、修士及び博士号(B A, M A, D A)を出す大学に昇格したものであり、デザイン、オーディオビジュアル・コミュニケーション、美術教育及び美術に関するフィンランド第一の大学となっている。

ヘルシンキ市の北東郊外、著名な製陶会社アラビア社の工場跡地にキャンパスを構えるU I A Hは、2000年度の学生数1,567人、その内訳は、学士課程469人、修士課程970人、博士課程128人となっており、教員1人あたりの学生数は11人である。また、この他232人の留学生在学していた。

同大学の学科構成については近く再構築が行われる予定であるが、現時点では次のとおりとなっている。

- ・美術(Art)
- ・美術教育(Art Education)
- ・陶芸・ガラス工芸(Ceramics and Glass)
- ・劇場・映画・テレビデザイン(Design for Theatre, Film and Television)
- ・ファッション・織物デザイン(Fashion and Textile Design)

- ・映画・テレビ(Film and Television)
- ・グラフィックデザイン(Graphic Design)
- ・家具・空間デザイン(Spatial and Furniture Design)
- ・写真(Photography)
- ・プロダクトデザイン(Product and Strategic Design)

この他ニューメディア制作等を行うMedia Labがある。

学生数内訳からも分かるとおり同大学は、大学院が中心となっている。また、(* 10)で記したように、UIAHの修士課程で理論を学ぶが、実習は設備の整ったラハティ校で行う学生が存在する。

同大学の2000年度予算は、2,660万ユーロ(約31.7億円, 1ユーロ=119円の場合)とラハティ校とほぼ同額であり、その内訳は、教育省から8割強の2,160万ユーロ(約25.7億円)、企業等から(Customer financing)340万ユーロ(約4億円)、研究関係(Research financing)で160万ユーロ(約1.9億円)となっている。

同大学関係者によれば、国立大学であるUIAHはかつて、現在に数倍する潤沢な国庫予算で運営されていたが、高等教育改革により大幅な減額となったため、学内教育組織等の改善・合理化や自己収入の増加に大きな努力を払っているとのことである。

例えば、同大学には、映画・テレビ用の大小のスタジオや舞台芸術用のスタジオ劇場などが設置されているが、収入増を図るため頻繁に貸し出されている。また、キャンパス自体も自前ではなく、不動産会社の建物を借りる形態をとっている。

7. おわりに

ラハティ校の運営・教育の特色をまとめると基本的に次のような点にあると考えられる。

教育コンソーシアムのもと、効率的な

運営がなされている。

厳しい試験で力量のある学生を選抜し、少人数かつ充実した実習環境の中で質の高い教育を行う。

産業界と連携・協力して、そのニーズに対応した実践的な教育を行う。

友好協力協定を結んでいる本学として、今後のラハティ校との学生交流、展示交流の充実による成果が期待できるのみならず、同校の実習・制作環境や特色ある教育方法等は参考になる点が多いと思われる。特に、高岡短期大学の、『職業に関する専門の知識と技術を教授研究し、より実践的、創造的な能力...を備えた有為な人材を育成する』という設置目的(学則第1条)、また、地域社会に開かれ、密着した大学という建学の理念を考える時、ラハティ校の、産業界と連携・協力して行われる実践的な教育のあり方は、本学として大いに学ばなければならないものと考えられる。この意味で、これから開始される教員交流の中で、派遣される本学教員が、専門の研究とともに、ラハティ校の特色ある教育方法等を十分に研究し、本学での教育に役立てていくことを期待したい。

なお、『ローマは1日にして成らず』のとおりに、例えば、ラハティ校で現在進められている産業界との連携・協力プログラムは、教員達が10年以上前から頻繁な企業回りなど大変な努力を重ねてきた結果として現在のようになったとのことである。今後、ラハティ校の教育方法等を学びながら、本学の教育を設置目的に則したより良い、効果的なものとしていくためには、教職員の、不断の努力と工夫の積み重ねが必要であろう。

一方、ヘルシンキ工業芸術大学については、大学院教育に重点を移し、実習の一部を設備の整ったラハティ校に任せるなど、割り切った棲み分けを行って、大学改革の中で運営の効率化を進めている様が見てとれた。

フィンランドにおいて、ポリテクニクの

運営も含め大胆な高等教育改革が行われた背景には、実は、1990年代の初めに同国を襲ったGDP(国内総生産)14%減、失業率20%という未曾有の大不況があった(*13)。この種の構造改革を断行できたことが、現在世界一の経済成長見込み率・国際競争力を持つに至った理由の一つではないかと考える。

わが国で始まった高等教育の構造改革との関係で、ラハティ校のコンソーシアムによる運営方式やヘルシンキ工業芸術大学の状況は、条件が異なるため直ちに参考になるとは言えないが、ステータスの改変を余儀なくされる各種国立大学の将来のあり方の一つとして、示唆するところは大きい。

注 釈

- * 1 . 訪問の時点で、本学産業造形専攻科2年の福田公子と産業デザイン専攻科2年の西島ゆかりの2名が留学していた。この他、本学産業造形専攻科生としてかつて派遣され、帰国後中退して改めてラハティ校の正規学生として入学した植木希美(2年生)が在学している。
- * 2 . 第2位はアメリカ合衆国であり、日本は75か国中第21位とされている。
- * 3 . フィンランドの高等教育機関は基本的にすべて国立であった。
- * 4 . フィンランドにはこの種のコンソーシアムが30存在し、ラハティはその中でも大規模なものとなっている。
- * 5 . 各機関の運営は、それぞれ、教育専門家等を含む運営委員会(Board of Governors)により行われている。
ラハティ校のホームページによれば、同校は、「コンソーシアムからの任命者及び教職員と学生の各代表者によるBoard of Lahti Polytechnicにより経営されるindependent commercial undertaking within the Consortium」であるとしている。
- * 6 . コンソーシアム側の『2001年OPERATIONAL MODEL』では正規学生(fulltime students)が3,600人となっている。一方、ラハティ校側の『大学案内』によれば登録学生(enrolled students)が「4,000人以上」、同校ホームページでは単に、「約4,300students」と記されている。
- * 7 . 例えば、デザイン学部、インダストリアル・デザイン・コースではかつて競争率60倍に達したこともあったとのことである。同学部では、4日間にわたる厳しい実技試験の前に、願書提出前一定の期間を与えて応募者に科した課題による事前選考で受験者のしぼり込みをかけている。
- * 8 . 産業界との連携で全学的に行われるプロジェクトとして10年以上前から始まっている『DYNAMO』がある。企業から、新製品の開発又は製品改良について注文を受けて、デザイン、ビジネス、工学、福祉・看護の各学部の中から関連する学生が集まり、分担・協力してプロジェクトを仕上げ、報道も含めた大規模な発表会に至るというもので、参加学生には3単位が与えられ、また、関わったプロジェクトの注文先企業への就職など、将来の進路にも大きく役立っている。
DYNAMOによるプロジェクト数は年間15から20件あり、同校マーケティング・マネジャーのキルピネン氏によれば、これまでに行われた150件にのぼるプロジェクトについて、参加企業の95%は結果に満足しているとのことである。
なお、DYNAMO以外に、各学部でも独自に企業との連携プロジェクトが活発に進められている。
- * 9 . 2001年度に家具デザイン・コースが新設され、3年後にクラフトデザイン・コースが廃止されることになっている。また、2002年度からArt and Designの教育者養成コースが新設される予定である。
- * 10 . その他、筆者らが訪問した時には、アメリ

カで学士を取得した後ヘルシンキ工業芸術大学の修士課程に属している留学生在が銀工芸の実習をしている姿が見られた。同大学が、高度な実習設備を有しているデザイン学部の実習を委託しているとのことであった。

後日ヘルシンキ工業芸術大学の同種の実習設備を見学することができたが、ラハティ側が、より高度な実習設備を有していることは一目瞭然であった。

なお、かつてデザイン学部で修士課程を設置することも考えられたが、大学サイドの反発があり、実現できなかったとのことである。



写真30 UIAHのジュエリー実習室



写真31 ラハティ校のジュエリー実習室

- * 11. ラハティ校全体としては世界30カ国, 111の大学等と協力関係にある。
- * 12. 製品となる原型から石膏型を制作し, その中に水で溶いた粘土を流し込む。粘土の水分を定められた時間石膏に吸収させることによって, 一定の肉厚による同じ製品が量産できる。
- * 13. 伊藤光彦, フィンランドを復活させた「銃口」- 土壇場で奮い立ち「人こそ資源」, 『選択』, 2002 .1

参考文献

- 1 .Operational Model 2001, Lahti Region Educational Consortium
- 2 . Lahti Polytechnic案内, 2001
- 3 . Lahti Polytechnic/Institute of Design案内, 2000
- 4 . University of Art and Design Helsinki UIAH案内
- 5 . ラハティ・ポリテクニク・ホームページ
<http://www.lpt.fi>